

御正忘章（五帖第十一通）

そもそも、この御正忘のうちに参詣をいたし、こころざしをはこ
び、報恩謝徳をなさんとおもいて、聖人の御まえにまいらんひとの
なかにおいて、信心を獲得せしめたるひともあるべし、また、
不信心のともがらもあるべし、もつてのほかの大事なり、そのゆえ
は、信心を決定せずは、今度の報土の往生は不定なり、され
ば、不信のひとも、すみやかに決定のこころをとるべし、人間は
不定のさかいなり、極樂は常住の国なり、されば、不定の人間
にあらんより、常住の極樂をねがうべきものなり、されば、
当流には、信心のかたをもつて先とせられたる、そのゆえをよくしら
ずはいたすらごととなり、いそぎて安心決定して、浄土の往生をね

がうべきなり、それ、人間に流布して、みな人のこころえたるとお
うは、なにの分別もなく、口にただ称名ばかりをととなえたらば、
極樂に往生すべきようにおもえり、それはおおきにおぼつかなき
次第なり、他力の信心をとるといふも、別のことにはあらず、
南無阿彌陀仏の六つの字のこころを、よくしりたるをもつて、
信心決定すといふなり、そもそも、信心の体といふは、經にい
く、聞其名号信心歡喜といえり、善導いわく、南無といふは
歸命、また、これ發願回向の義なり、阿彌陀仏といふは、すな
わちその行といえり、南無という二字のこころは、もろもろの雜行
をすて、疑なく、一心一向に阿彌陀仏をたのみたてまつるこ
ろなり、さて、阿彌陀仏という四つの字のこころは、一心に彌陀
を歸命する衆生を、ようもなくたすけたまえるいわれが、すなわち、

阿彌陀仏の四つの字のころなり、されば、南無阿彌陀仏の
体を、かくのごとくころえわたるを、信心をとるとはいうなり、こ
れすなわち、他力の信心をよくころえたる、念仏の行者とは申
すなり、

あなかしこ　あなかしこ

御正忌章の大意

親鸞聖人の御正忌にあたって報恩謝徳の思いから参詣され
た人々のなかには、信心を得た人も得ていない人もあるでしょう
が、信心のことはなによりも大事なことです。というのは、信心を

決定しなければ、このたびの浄土往生は定まらないからです。ですから信心を得ていない人はただちに信心を決定してください。

人間界は無常の世界であり、浄土は常住の国ですから、無常の人間界を離れて、常住の浄土を願わなければなりません。それで、浄土真宗においては、信心がなによりも大事であるということを知らなければなりません。ただちに信心を決定して浄土往生を願うべきです。世間の人は信心がなくても、ただ念仏さえしていれば浄土に生まれるように思っていますが、それはおおいに疑わしいことです。

他力の信心を得るということは、南無阿弥陀仏の六字のいわれをよく心得ることであり、このことを信心が決定するというのです。信心とは、經典には、「聞其名号信心歡喜」と説かれています。

す。善導大師は、「南無」というのは帰命、また発願回向の義なり。
阿彌陀仏というは、「すなわちその行」と釈しておられます。「南
無」とは、「自力にたよることをやめ、疑いなく、一心に阿彌陀如来
をたのみおまかせすることであり、「阿彌陀仏」とは、「一心に阿彌
陀如来をたのみたてまつる衆生をお救いくださることです。このよ
うに南無阿彌陀仏のいわれを心得ることを、信心を得るというの
であり、このように心得ている人を、他力の信心を得た念仏の行
者というのです。